

孤島

交際のことを聞くと九割が悲しい記憶、世相のことを聞くと暑さと涼しさ。

旧友のことを聞くと九割が忘れており、生活のことを聞くと本当に望みがない。

都市のことのことを聞くと九割が悲しい話で、人生のことを聞くと本当に痛々しい。

『都会の中の孤島』を読むと、あでやかな美しさに驚嘆させられます。全文がうっすらと灰色に覆われ、真っ向から来るのは戦後の世の変転と重々しさ。人々は俗世の塵やほこりの中で迷い、さすらい、良心をごまかして、墮落し、清算しています。

平凡な生活の中に思わぬ結果が含まれ、人生の終点である死が急に平凡な人生の出口になって、正しい選択は予想する結果が得られないのです。『オモチャ箱』の庄吉が、かつての成績を胸に働きもせず、身上を潰してもなお責任感も恥ずかしげもなく酒色に耽る姿にしても、『水鳥亭』のたいそうな大地主でありながら頭の回転が鈍いため乞食にあこがれ最後には鶏小屋で首をつってしまふ梅村亮作にしても、『白痴』の愛されていると誤解した白痴の女と肉体を渴望する男にしても、『都会の中の孤島』のミヤ公の身代わりになったグズ弁にしても。誰にでも人それぞれの悲哀があり、凶悪で俗っぽい作家ももちろん夢破れて終わり、何もしない村長は結局その気にかかる相手を理解できませんでした。戦争中の人は平凡である資格さえないのに、彼の愛情を見破れる人などいるはずもありません。

この一切合切がまるで書名『都会の中の孤島』を裏付けているかのようです。彼らはすべて生きて無為に自分の生活を過ごしており、希望も未来も見えない漆黒の殻の中で自分のこだわりで執着し、自分を泡のような繭に縛りつけ、天国と深淵が共にあります。

全体として無頼派を代表する太宰治先生の「生まれて、すみません」を想起するような、自嘲した自虐的な態度や、病的な状態とうっとうしい事物が奈落の底まで墮落しても少しも意識しない孤島感には驚かされます。しかし個人的にはこのような隠喩はむしろ作者の内心の批判と転覆を体現しているように感じます。

文学は時代から生まれて、作品は生活から生まれるものです。この作品は、戦後の一部の人の一部の生活の縮図のようです。封建的な古い制度、茫漠とした新しい時期、新旧の価値観の衝突。もしかすると墮落の本質は希望、批判は再生のため、否定は期待のためなのかもしれません。漆黒の世界の中で光明を期待すること、そのものが決して簡単なことではあり

ません。墮落は決して墮落ではなく、人は正しい墮落する道の上で、自分を見つけ、取り戻す必要があるのかもしれませんが。これは本質的に悲観的な態度ではなく、無頼派も頹廢や悲観を代弁しているわけではありません。深海に身を置くような重苦しい気持ちにさせる文は真実を探る表象に過ぎず、それによって人の本性を回復させ、関わりを清算して、真相を求めるものです。死地に置かれてはじめて活路を見出し、墮落に身を置くことで目覚めるのです。

この本を学び味わう中で、次第に大和民族のことが分かってきました。日本人は腹の中が曖昧で、理性と感性、寂しさとにぎやかさのバランスが良く、抑制的、冷静で、以心伝心の心を求め、礼儀よく人に接して、入念で、それでいて離れられない距離感があります。彼らは敬語や礼儀などの形で内心を押さえつけ、感情は細かいところで表現します。作者は底辺の人々の生活を通じて、そうした自嘲と憂鬱をあからさまにしているのです。小人物の感情の起伏、抑えられた中でのどうしようもなさ、すべて自然でありながら深い表現です。

この本は歴史を振り返り考えるかつての意義だけでなく、この本を通じて日本人の生活の状態を感じる意義もあります。ちょうど作中にあるとおり、「都会の真ん中にだって、孤島の中のように生活している人はタクサンいるものだ。彼や彼女らは、電車やバスなどに乗って勤めにでたり買物にでたりすることはあるが、それはヨソ行きの生活で、その個人生活は全く孤島の中のように暮している人は少くはない」のです。この話はたとえ今の日本を持ち出したとしても熟考に値します。

日本経済新聞の調査によると、日本の男性は世界の最も孤独なグループです。日本の男性だけでなく、日本の子供も世界一孤独です。日本人の孤独感は生まれつきのように、島国の環境、考え方などの影響を受けて、日本人は内心の孤独を常態と見なしていながら、集団の中での孤独感を非常に恐れます。自分が主流から追いやられることを意味するからです。彼らは内心で孤独を味わいながら思案をめぐらして集団の中に溶け込もうとします。たとえ仮にでも、集団に溶け込んで、誰にでも礼儀正しくほほえみ、決して本心を明かしません。近藤大介は著書の中で「しかし今の東京の町には静かさ、清潔さと成熟しかない」と述べています。日本人は自分を偽装することに慣れ、他人の邪魔をせず、悲しもうが喜ぼうがそっとしています。目の前で大風が起り黒雲が湧いても、平静な表情をしています。

こうした冷ややかな消極感のある孤独は時代の発展につれて次第に変化し、今の中国で言う「喪文化」になっています。「喪文化」は現在の青年の精神の特質と集団の焦りを反映

しており、新時期の青年の社会意識と社会心理がいくらか表出したものです。若い世代の大多数が氣力をくじかれて感じる主な原因は単身、住宅価格、仕事などです。加齢を前に、生活の苦さによる焦りと無力感のため、新世代の若者はこのような表現方式で生活上の空虚さや不満を発散することを選んでいきます。この背後にあるのは社会のやさしさに対する若い世代の抵抗です。「喪文化」は悲観的、退廃的に見えますが、退廃の中でも圧力の次々と重なる生活と対抗する楽観的な心理状態が見られ、実はやはり生活に対するあこがれで満ちています。

ロマン・ロランは「世界でただ一つの真の英雄主義は、生活の真相を見分けた上で心から愛することだ」と語っています。気落ちしても絶望することはなく、孤独でもそのために生活を放棄することはありません。たとえ孤島にいても、誠実な墮落は恐くありません。噴出しそうな孤独に浸り、生活の細々としたことに向き合っこそ、本当の期待が浮かび始めるのです。

悲観的で退廃的な空虚が真っ向から来て、苦境の焦りと無力さに向き合っこそ、本当の反抗が幕を開けます。

天地のために決心して、生命のために命を捧げ、進むため断絶した学問を継ぎ、万世のために太平を開くのです。

時代のために決心して、生活のために命を捧げ、未来のために期待して、光明のために抵抗するのです。

読んだ本：坂口安吾『都会の中の孤島』